

1. 両生類

鳥根県は、現在までに22種の生息が確認されている。有尾目はサンショウウオ科5種、オオサンショウウオ科1種、イモリ科1種の計7種、無尾目はヒキガエル科2種、アマガエル科1種、アカガエル科9種、アオガエル科3種の計15種である。

県内における分布の特徴は、豊かな自然を反映して海岸部から平野部、中国山地の険しい渓流域や森林の林床まで、多くの種類に恵まれている事である。平野部から中山間地にかけてはトノサマガエル、ヌマガエル、ツチガエル、ニホンアマガエル、シュレーゲルアオガエル、ニホンアカガエル、アズマヒキガエル、ウシガエル、アカハライモリが見られ、さらに山地にかけてはニホンヒキガエル、ヤマアカガエル、タゴガエル、モリアオガエル、カスミサンショウウオ、山地の中流から上流域の小河川などにはカジカガエルやオオサンショウウオ、渓流域にはナガレタゴガエル、ブチサンショウウオ、ヒダサンショウウオ、ハコネサンショウウオが生息している。隠岐諸島には、固有種であるオキサンショウウオとオキタゴガエルが2種生息しているが、どちらかというとも平地よりも高地に生息するサンショウウオやタゴガエルの仲間が平地にも生息していることは大変興味深い。

両生類の卵塊はゼリー状でブヨブヨしており乾燥に弱く、産卵場所は必ず水の中で行う。平野部から中山間地、山地にかけては流れのない平地の溜まった水場である水田や池、山地の中流域から上流域では水の清らかな溪流や小河川が産卵場となり、孵化後も水中で生活し、オタマジャクシから変態して成体になってはじめて陸地に生息する。モリアオガエルやシュレーゲルアオガエルは例外で、池の水際の樹上や水田の畦道の土手等に卵塊は産み付けられるが、孵化したオタマジャクシ（幼生）は、水中でないと生きていけない。両生類は産卵場所である水場が失われると繁殖が出来なくなり、絶滅の危機に瀕する動物である。それぞれの動物はお互いに生息環境や産卵活動が競合しないように、環境に適応し上手く棲み分けて生活しており、生息域でのバランスの変化はその環境に適応していた複数の種の絶滅をも意味することになる。

近年、鳥根県の豊かな自然にも少し翳りが見えてきたように思える現象がある。国の特別天然記念物であるオオサンショウウオの幼生の生息数がきわめて少なくなってきた。中型から大型のオオサンショウウオは自然環境の変化に対応できる能力を十分有しており、人工的

な池や水槽内でも長期間生活できるが、清楚な清流域で成長する幼生や小型のオオサンショウウオの発見例が年々減少していることは大変気になる事である。幼生の生活環は不明な点が多く、次世代を担う幼生の激減は、将来オオサンショウウオの絶滅が予想されるだけに事は重大である。いろいろな要因が考えられるが、産卵床である上流域の岸や岩の下の穴が砂で埋没して、産卵できない状況が生じている。原因は、大雨等による直接的な上流域の環境破壊ばかりでなく、山を構成する森林相や源流のさまざまな要因による水量の変化が重なって起こっていると推察している。特に、産卵場である河川の上流域から小渓流域の自然環境の悪化が懸念される。

環境省第4次レッドリスト（2012）によると掲載種数は43種、内訳は絶滅危惧Ⅰ・Ⅱ類22種、準絶滅危惧20種、情報不足1種である。有尾目はハコネサンショウウオ属以外の全種23種（掲載種全体の54%）、南西諸島固有種15種（同35%）、隠岐・対馬固有種4種（同10%）を占め、他はダルマガエル2種とトノサマガエルである。鳥根県に生息する両生類は、絶滅危惧種（オキサンショウウオ、カスミサンショウウオ、オオサンショウウオ）、準絶滅危惧種（ヒダサンショウウオ、ブチサンショウウオ、アカハライモリ、オキタゴガエル、トノサマガエル）である。

今回のしまねレッドデータブックの改訂にあたり、環境省のレッドリストを参考としながらも、鳥根県の豊かな自然の維持を願うとともに、未来にわたって人と生物の共存を意識した選定を行った。特に各地域や地形に応じて、産卵場となる水場における代表種を9種、隠岐島固有種のオキサンショウウオは絶滅危惧種、オキタゴガエルは準絶滅危惧種とするとともに、新たにカスミサンショウウオを準絶滅危惧種として計11種を掲載した。

人が多く住む平野部から山地の中流域にかけては、一昔前は水田地の農薬使用、コンクリート製側溝によるエサとなる昆虫の減少による要因が大きかったが、近年では都市開発に伴う、道路整備（車道・歩道・自転車道）、宅地の造成、公園整備等の公共事業によって小河川や溜池の形状が変化し、産卵場が減少することで影響を受ける種として、カスミサンショウウオ、モリアオガエル、カジカガエル、タゴガエルを選定した。

一方、山地の上流から渓流域では、局地的な自然災害による渓流域および河川の流失による改修工事、防災事業、林道や農道、森林部の公園整備等によって生息環境の変化の影響を直接受けて、今後減少していく要素を多分に持っているとして、分布域が非常に限られているオオサンショウウオ、ナガレタゴガエル、ブチサンショウ

ウオ、ヒダサンショウウオ、ハコネサンショウウオを選定した。

大規模なダムや道路、公園等の建設は、必ず環境アセスメント調査が義務づけられており、その地域での生息調査が行われるとともに今後の影響が議論される仕組みがあるが、都市部における小規模な整備事業は、そこにどんな生物が生きているかさえ調査することもなく、工事が行われているのが実情である。それまで普通種と思われていたようなカスミサンショウウオやトノサマガエル、ヌマガエル等の鳥根県ではどこにも生息している種でさえ減少してきている実情を考えると、今後はこれらの動物に自然を見張ってもらう事も考える時期に来ているかも知れない。

両生類は生息域の環境変化に対応するのが下手で、鳥のように変化を察知して飛んで移動することもできずに細々と生き続けるしかなく、絶滅する危険性に常にさらされている事を考慮していくべきである。

2. 爬虫類

本県では、現在までに15種の生息が確認されている。カメ目はイシガメ科2種、ヌマガメ科1種、スッポン科1種の計4種、トカゲ亜目はヤモリ科1種、トカゲ科1種、カナヘビ科1種の計3種、ヘビ亜目はタカチホヘビ科1種、ナミヘビ科6種、クサリヘビ科1種の計8種である。

県内における分布の特徴は、両生類と同様に豊かな自然を反映して多くの種類に恵まれている事である。カメ目では、クサガメ、ニホンイシガメ、ミシシippアカミミガメ、ニホンスッポンが生息している。アカミミガメは、アメリカ南部からペットとして輸入された子供たちに人気のあるミドリガメ（愛称名）で、成長して大型化したことで、脱走または放棄されて野生化しており、住宅地の多い河川では、かなり広範囲に分布している。水の都と呼ばれ松江地区の松江城のお堀、堀川にはアカミミガメが高密度に生息している。最近全国的に騒がれているカミツキガメなどの凶暴なカメの分布については、県内での確認はほとんどないが、まれに外来種の捕獲例が散見される。

外来動物であるミシシippアカミミガメは、非常に大型となり甲羅長が50cmに達する個体もいる。食欲は旺盛で繁殖力も強く、汚染された水質でも生存可能であることから、その生息範囲は急速に拡大している。ニホンイシガメやクサガメと生息域が重なることから、これら日本固有種の減少が問題になっている。県の許可（特別採捕願）を頂いてカニガゴによる捕獲調査を行った結果では、ミシシippアカミミガメ：ニホンイシガメ：クサガメの割合は50：1：1で、ミシシippアカミミガメが圧倒していた。ニホンイシガメ、クサガメは、河川改修などによって分布域が狭くなっていることに加え、外来種の影響を強く受けていることで加速度的に減少していると考えられる。またニホンスッポンは、県内での生息状

態は不明で、今後詳しい生息調査が必要であると考えている。

トカゲ亜目は、ニホンヤモリ、ニホントカゲが平野部の人家近くに比較的多く生息している。ニホンカナヘビはどちらかというと山間部に生息し、低山地では良く見かけることが出来る。

ヘビ亜目は、タカチホヘビ、ジムグリ、アオダイショウ、シマヘビ、ヒバカリ、シロマダラ、ヤマカガシ、ニホンマムシが生息している。平野部から低山地にかけての人家の近くでは、シマヘビ、シロマダラ、水田ではヤマカガシ、山間部では、アオダイショウ、ヒバカリ、ジムグリ、ニホンマムシ、タカチホヘビが生息している。シマヘビ、ヤマカガシは良く見かけるが、シロマダラやタカチホヘビは夜行性で特有の食性や生息環境を有し、生息数も少ないと考えられ目撃例は少ない。

環境省第4次レッドリスト（2012）によると掲載種数は56種、内訳は絶滅危惧Ⅰ・Ⅱ類36種、準絶滅危惧17種、情報不足3種である。南西諸島固有種42種（掲載種全体の75%）、対馬、南鳥島、男女群島等の固有種8種（同15%）、ウミガメ3種（同5%）を占め、他はニホンイシガメ、タワヤモリ、ニホンスッポンの3種（同5%）である。今回の変更点として、ニホンイシガメは準絶滅危惧種にランク変更。情報不足にニホンスッポンが選定されている。本県に生息する爬虫類は、準絶滅危惧種（ニホンイシガメ）と情報不足種（ニホンスッポン）である。

今回のしまねレッドデータブックの改訂にあたり、両生類と同様に本県の豊かな自然の維持を願うとともに、未来にわたって人と生物の共存を意識した選定を行った。特に爬虫類は、ミミズや両生類、爬虫類、ねずみ等の小型哺乳類をエサとしているため、これらの動物の減少にともなって、年々発見報告例が減少していることを考慮して、平野部と山間部における代表種を掲載した。

平野部から山間地にかけての比較的人家の近くに生息する種としてシロマダラを選定した。シロマダラは、ニホントカゲやニホンカナヘビを捕食する特有の食性を示している。近年、住宅地周囲のコンクリート化やアスファルト化によって石垣や土砂地が減少し、エサとなるこれらの爬虫類の生息地が狭小化したことで、平野部と山間部との境界地域で細々と生きているのが現状である。今後減少していく要素を多分に持っていると推察して選定した。

山間部の代表種としてタカチホヘビ、ジムグリ、ヒバカリを選定した。タカチホヘビは、夜行性で土中に生息しており、環境に対する選択性が強く分布域も限られていることから目撃例も少ない希少種と考えられる。ジムグリは、森林地の代表種で高温環境に弱い特有の習性がある。ヒバカリは、山地の水田周辺に生息する代表種である。ともに局地的な自然災害による改修工事および防災事業、林道や農道、森林部の公園整備等による生息環境の変化の影響を強く受ける可能性が高く、今後減少していく要素を多分に持っていると推察して選定した。

爬虫類の生息分布域は、エサとなる両生類などの影響

を強く受ける可能性が高く、両生類と同様に絶滅する危険性に常にさらされている事を考慮していくべきである。都市部における小規模な整備事業等によって生息地が減少し、それまで普通種と思われていたようなニホン

イシガメ、ニホントカゲでさえ目撃例が少なくなっている実情を考えると、継続的にこれらの動物を見守っていく必要があると思われた。

(秋吉英雄)

両生類・爬虫類掲載種一覧

計15種

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- オオサンショウウオ
- オキサンショウウオ

計2種

準絶滅危惧 (NT)

- | | | |
|--------------|-------------|-------------|
| ○ カスミサンショウウオ | • ブチサンショウウオ | • ヒダサンショウウオ |
| • ハコネサンショウウオ | • タゴガエル | ↓ オキタゴガエル |
| • モリアオガエル | • カジカガエル | • ジムグリ |
| • ヒバカリ | • シロマダラ | • タカチホヘビ |

計12種

情報不足 (DD)

- ナガレタゴガエル

計1種

【記号説明】

- : カテゴリー区分変更なしの種 (12種)
- ↑ : 上位のカテゴリー区分への変更種 (0種)
- ↓ : 下位のカテゴリー区分への変更種 (1種)
- : 新規掲載種 (2種)
- ◇ : 情報不足からの変更種 (0種)
- ◆ : 情報不足への変更種 (0種)